

心の眼

茗溪塾塾長 宇野雅春

2009年もそろそろ大詰めを迎えようとしています。世界的な不況と新型インフルエンザ、何か暗いニュースが世界中を駆け巡った一年でもあったように思います。毎年毎年「受験」という、一人一人の生徒にとっては非常に重い経験を体験している側からすると世界の出来事よりも何よりも、目の前にいる生徒のことが気にかかります。あの阪神大震災の時ですえ「受験」はありましたし、神戸では受験勉強のさなかに地震に合い命を失った高校生もいました。青春まったただ中の若者からすると、世の中の様々な出来事が着実に時とともに経過していくこと自体を、とてももどかしく感じることもあるかもしれません。

まことしやかに「2012年」は地球が滅びるといふ噂も、同名の映画の公開と同時に生徒たちの間では囁かれていたりします。生きていくことや、トライしていくことの重さに出会ったとき、それをやめる理由を、誰も考えるときがあります。でも、時代は無慈悲に流れていきます。自分の足元をしっかりと見ていないと、感情に流されているうちに大切なものを見失ってしまいます。一番怖いのは自分を見失うということです。自分の気持ちと自分がキチンと向かい合うということが案外難しいことだと思うのです。

今年、私にとっての最大のニュースは、ヴァンクライバーン国際ピアノコンクールで日本人が初めて優勝したということです。クライバーンをして「奇跡のピアニスト」と言わしめた辻井伸行さんは、生まれた時から全盲というハンディを持っていました。このニュースは、感動をもって全世界に広がりました。コンクール後の日本での演奏会は、どこも、ソールドアウトで、いつになったら生演奏が聞けるのかは、予想できない感じです。CDはクラシック歴代最高のセールスをあげているといえます。TVで演奏に触れた時の驚きもありますが、ドキュメンタリーやニュースで報道される様子を見てみると、とても胸を打たれることが多くあります。常に最高に楽しい音楽を人に聞かせたいという姿勢や「心の眼」という彼自身の言葉、「普通の人が見られないものも僕は見ているのかな」というポジティブな姿勢。全盲という現実には、はじめ親は打ちひしがれたといいますが、2歳のクリスマスにおもちゃのピアノでジングルベルを弾いている息子を見たときから、運命が変わったといえます。「やっと光が見えた。」とお母さんはその時のこと語っていました。

「できないことを嘆くより息子のできることをやっといこう」というお母さんの決心が、才能の開花へとつながっていきます。楽譜の存在しない状況の中で聴くことによってメロディーを記憶する力、一回聴いただけで一音一音を正確に記憶してしまう事、現在ではオーケストラと合わせるときも、指揮者が見えなくても、気配でわかるといえます。

彼が持っている「心の眼」です。「美しい空とか山とかに行き、風を感じたり、鳥の声を聞いたりして、いろんな美しいものを心の眼で感じ、心の眼で見る」と彼は言います。17歳の時にショパン国際コンクールで批評家賞を受けていますが、決勝に残れなかったことについても、「17歳の自分にできることを精いっぱいやって、やれるだけのことをやったから悔いは何もない」と言っています。

彼の奏でる音楽が素晴らしいのは、彼が「心の眼」をもっているからだと思います。

栄光は、いつもいつも光り輝く中にあるものではなく、長く苦しい道のりを伴うものと私は思ってきたけれど、その人の持つ「心の眼」が、もしかしたら一番大切なことなのではないかと思うようになりました。まっすぐにその人を導いてくれるもの。もしかしたら私たちが見失っていることを、辻井伸行さんの奇跡は、教えてくれた気がします。